

FICオープンセミナー「日韓作家の対話」

高柳, 俊男 / 内山, 政春

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication : Ibunka / 異文化

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

132

(終了ページ / End Page)

132

(発行年 / Year)

2023-04-01

■FIC オープンセミナー「日韓作家の対話」

高柳俊男、内山政春

「朝鮮語」兼任講師の吉良佳奈江先生より、自ら翻訳した作品集『二度の自画像』（東京外国語大学出版会、2021年）の原作者であり、韓国国立順天大学教授でもある全成太（チョン・ソンテ）氏を韓国から招き、イベントを行いたい旨のお申し出があった。「朝鮮語」担当の専任教員としては、新型コロナウイルス感染症のため韓国へのSAが3年間実施できていない中、学生たちの韓国文化への関心を高める点で有益であり、FIC オープンセミナーとしての実施を教授会に提案し、承認を得た（実施経費は全額、韓国文学翻訳院の海外交流助成による）。

イベントはまず、全成太氏による基調講演から始まった。全氏は学生を主対象に、大学生の学びとしては、何か答えを出すことよりも、問いを発することがより重要であるとのメッセージを強調した。

次いで、全成太氏と中沢けい本学文学部教授との対談に移ったが、二人は「東アジア文学フォーラム」で旧知の間柄であることもあり、中沢教授の質問に全氏が答える形で和やかに進行した。その中で、自作の傾向や日韓文化交流等について幅広く語られたが、ベトナム戦争における自国の「加害」に目を向け、いずれの国であれ自民族中心主義から抜け出ることが大事だと述べるなど、物事を普遍的・双方向的に捉えようとしている姿勢が印象的だった。

また、企画した吉良佳奈江先生や対談相手である中沢けい先生の教え子の皆さんが、積極的に関わっている姿も目についた。受付等の業務にとどまらず、作家の短いエッセイ2編を共同翻訳して配付資料に載せるなど、内容面でも役割を果たしていた。

参加者は計20人前後。本学学生のみならず他大学学生、そして学外から出版社社員や作家の方も参加した。こぢんまりとした集まりではあったが、その分、予定時間をオーバーして実施された質疑応答も含めて、日本で注目を集めている韓国文学の現在や作家の内面を窺い知ることのできる、良き機会になった。

▶日時：2022年12月3日（土）15:00～17:25

▶会場：大内山校舎 Y404（対面）

▶参加方法：google form による事前申込み制

▶参加人数：約20人